



町民文芸

只見短歌会

一月詠草

大塚栄一

指導

亡き母の作りし鞆枕許に置きて寝るらし施設の孫は

馬場 八智

激動の昭和を生きつぎ平成の除夜の鐘の音あと一度か

渡部ゆき子

受験日の孫に優しく気張るなど声かけ朝の受話器を置きぬ

関谷登美子

朝まだき蛇口凍れば汲み置きし水を沸かして夫と茶を飲む

小倉キミ子

ざらざらのばあちゃんの手で搔ひてとふ柔き孫の背そつと撫でやる

目黒 富子

祖母と会ひカメラ向ければ恥じらふもとつきにピースわが真似をして

飯島小百合

栄養剤口に合はむと言ふ従姉に牛乳やコーヒー混ぜて試む

新国由紀子

正月もただ忙しく過ぎし来てわが健康をふり返りみつ

渡部ヨリ子

介護施設に入所の人ら看取りある職員等つねきびきびとして

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

二月例会

目黒十一

指導

鐘樓の眼下となりぬ雪の寺

アツ子

前の家の灯りも見えず雪の夜

味代子

吉 児

命綱しめて茅屋根雪落し
節分や乳歯ちらちら離乳食

弘 子

幸 生

除雪機の自走なれども手に重し
外にも出ず膝ほどと答う雪見舞

恒 夫

信

受験生まなじり決して足早に
兜太死す心受け継ぐ春時雨

礼

都

大荷物学校始めの子供かな
初曆さながら行かぬ部屋に掛け

一 穂

洋 子

しんしんと地球の冷えて音もせり
手の中の中也の雪はただ真白

修 一

豪雪や幾度耐え抜く村社
雨水とや聞きて微かに心浮く